

# SCUDERIA

MAGAZINE FOR FERRARISTI 63



## 12 Cylinder New Generation

599 612 Scaglietti GTC Package  
575GT Zagato 612 Scaglietti Pinin farina K

My Favorite Ferrari/Yoshiho Matsuda  
Lorenzo Bandini History 248F1  
Villa d'Este Concours Time Machine Festival

**ホビダス**  
趣味の総合サイト

[www.hobidas.com](http://www.hobidas.com)

# PETER KALIKOW'S FERRARI 612 "Kappa" SCAGLIETTI



トランクリッドに取り付けられたエンブレムは、1950年代に250GTなどに使用していたフェラーリとピニンファリーナのフラッグが交差したデザインを採用した。

## Gran Turismo Soul

今年4月に行われたピラ・デステのコンクール・デレガンスに2台のカスタム・フェラーリが登場し話題となった。いずれも1950年代のオーダーメイド方式を蘇らせたスタイルで新たに作り出されたモデルである。本稿ではそのうちの1台、612スカリエッティをベースとしたクルマを紹介しよう。

text & photo : Marcel Massini  
translation : Hiroshi Yoshida (吉田 弘)



1950年代のフェラーリはオーナーからの注文でクルマを作り上げており、そのシャーシ上に構築されるボディも個性的なスタイルで登場していた。しかし現代の社会環境の中で、そんな注文をメーカー自ら受けることは製造ラインという形態を持つ以上、困難な状況になっている。そこで新たに脚光を浴びることになったのがカロツェリアによるカスタム化である。

2006年4月にイタリアのコモ湖畔で開催されたピラ・デステのコンクール・デレガンスに、アメリカの著名なフェラーリ・コレクターであるピーター・カリコウがピニンファリーナに依頼して製作したカスタムカーが展示され話題となった。

ピーター・カリコウはニューヨークの都市交通システム(MTA)の会長職に就いており、また不動産業でも成功した人物である。そのカリコウ氏はピニンファリーナのデザイナーに612スカリエッティのカスタム化を依頼することを決意し、自らデザイナーたちとの会合を持つにいった。それはクルマ本来の優雅さと、それを強調するスタイルを生み出すために必要な機会だったのだ。

“Gran Turismo Soul” (グラントウリスモ魂とも訳したらいいのだろうか) を現在のフェラーリのラインナップの中で最も濃厚に漂わせているモデルが612スカリエッティだ。ピーター・カリコウの要望を完全に再現するためにはカロツェリアが本来行ってきた伝統的な作業が欠かせない。また、その技術を伝承するためにも歴史的に必然性のある工房で作業しなくてはならない。ピーターはそんな理由もあってピニンファリーナと612スカリエッティのコンビネ

ーションを選択した。プロジェクトの全体像はクライアントが描いたプランに基づいて進められた。“ボディは新しく作り直すのがベストなのだが、スタイルの変化はあまり大胆にはしたくない。フェラーリに精通した専門家をもうならせる仕上げとしたい。”カリコウはスタイリングの提案に引き続き、クルマ本体の機能面での要望から、さらにはボディカラーやインテリアに用いる素材や、その色調まで細かく注文を出した。ピーター・カリコウによる特別注文の612スカリエッティは、まさしく顧客のオーダーによるカスタムカー作りとして行われた。デイリーで使用する顧客がゆったりとくつろいで乗れるクルマ

とするため、必要とされる装備はあらゆるものを取り揃えている。

実際の作業工程についてはピニンファリーナの特別製作部門が行い、マネージャーのパオロ・ガレラ氏の監督の下、カンビアーノのアトリエで進められていった。その結果誕生したこのクルマには、カリコウ氏のすばらしいフェラーリ・コレクションが醸し出すオーラのようなものが表現されており、それはモダンとクラシックが融合したユニークなスタイルとして表面に現れている。

ポツィ・ブルーにペイントされたドリームカーのスタイリングを印象付ける造形は、まるで'50年代や'60年代のモデルのようなデ

2006年5月に行われたピラ・デステのコンクール・デレガンスで初披露された612“カッパ”スカリエッティ。ニューヨーク州のライセンスプレートに書かれているのは“K”の一文字だ。

後部の眺めはピニンファリーナらしい満開だ。半分露出したテールランプはエンツォ・フェラーリを連想させる。ルーフ後端からトランクリッドに繋がるラインは1950年代に用いたテールフィンを再現する造形が取り入れられた。



フェラーリ・コレクターの夢を実現した真のドリームカー。



テールランプはエンツォ・フェラーリのように上半分が車体から露出するスタイルを採用している。こういった曲面を生かしたスタイリングもカスタムモデルを作る高い技術の表れである。

12  
Cylinder  
New Generation

ザインの格子状に作り直されたラジエターグリルから始まっている。さらにエンジンフード上のエアインテークやフロント・フェンダー・サイドに大きな開口部のエアアウトレットを新設し、ガラス・ルーフにはフォトボリック・セルを用いた調光システムが採用されている。ルーフの左右からリア・フェンダーに流れるラインにはピニンファリーナが描き出した美しいフォルムのテールフィンも表現され、テールランプはエンツォ・フェラーリのように半分ほど埋め込まれた形状になった。

インテリアも顧客のオーダーどおりに改修されており、快適なクルーズを約束する装備が取り揃えられた。タバコ・ブラウンのレザーはイタリアの専門家、ポルトローナ・フラウによって細部まで丁寧に仕上げられている。その色は1990年代のコノリア-A-4480だ。

ピニンファリーナは“ドリームカー”を欲する顧客の願いを実現することができる。それは単に線を引いてのデザインに留まらず、機械的な部分の設計から実際の製作工程まで含め、現実には走れるクルマを作り出すことなのだ。そんなめったにないチャンスがこの会社は提供している。ピニンファリーナは優秀な技術を持った伝統ある企業であり、顧客の要求をしっかりと見据えたデザインを行ってきた集団なのだ。大量生産されるクルマにはない顧客の望む要素を取り入れた特別なスタイル、高品質なクルマを作り出すことでオーナーに満足を与えることを目指している。

ピニンファリーナの特別製作部門は、彼ら自らクルマを作り出すユニークな経験を有しており、コレクターやクライアントの高い要求に応えることのできる会社組織なのだ。この独特な方式を維持しているピニンファリーナは、永遠に残るであろうすばらしいデザイン、遅い走りを約束するエンジニアリング、そして品質の高さを保った作業を約束する。

クライアントはその計画の中心にいる。デザイン、エンジニアリングの要求などに積極的に関わり、担当スタッフとのブリーフィングを通して計画の進行を把握することができる。その内容も単に机上での打ち合わせだけでなく、実際に組み立て作業を視察することで、ユニークなクルマの誕生に立ち会うことができるのだ。もちろんその夢のクルマをドライブする楽しみもそこには用意されている。

ピニンファリーナのC.E.O.、アンドレア・ピニンファリーナは現在の会社が提供できるものをこう説明する。“基本となるのは今日まで築き上げてきた伝統的なサービスを顧客に届けることだ。そこには最先端の技術を用いた計数的な要素も含まれており、最新のCADやCAEといったツールの導入も用いられる。さらには選ばれた顧客はピニンファリーナのテスト・グラウンドへ入ることも可能で、そこで彼らは秘密のベールに包まれた世界の一端を見ることができるとだ。”

このプログラムの導入に際してひとつだけ強調しておきたい。このプログラムは毎

日の使用に耐える車を生み出すことであり、オーナーがお気に入りのキャビンでゆったりとドライビングに専念できることを目指しているということだ。このような要求を具現化するために必要な高度な技術を導入して作り出されるモデルは、年間にごく限られた台数が製造されることになるだろう。

ピーター・カリコウの依頼により製作されたこの612“カップ”スカリエッティは完全なワンオフモデルで、デザインなどのすべての著作権はクライアントであるカリコウ氏が所有している。ちなみに、この“カップ”に与えられたシャシー・ナンバーは145746 (VIN: ZFFAA54A 260145476) で、アメリカで必要とされるすべての登録書類を完備している。

インテリアもグラントウーリスモらしいゴージャスなものが採用された。イタリアのポルトローナ・フラウによって仕上げられたタバコ・ブラウンのレザーが大人のGTカーらしさを強調する。



ピニンファリーナならではの作り込みが個性を際立たせる。

# 12 Cylinder New Generation



フロントの眺めでは、エンジンフード上に新設された大きなエアインテークが目立つ。またラジエターグリルも格子状に作られており、1950年代のフェラーリを連想させてくれるデザインが採用された証だろう。



スカッフプレートには、このフェラーリの著作権を持つカリコウ氏の名前と、製作を担当したピニンファリーナの名前が刻み込まれている。

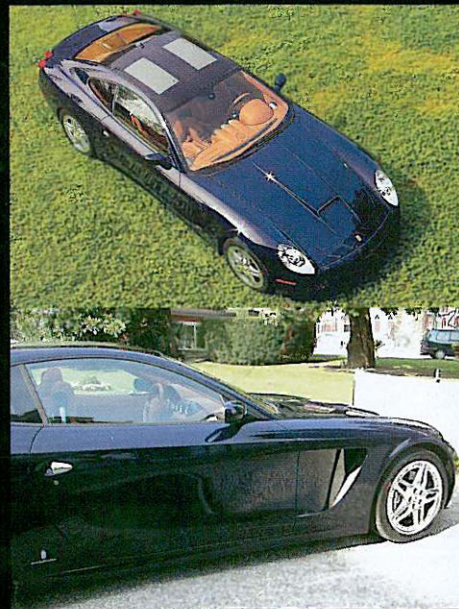


エンジンフードに新設されたエアインテークの形状は、カリコウ氏が所有する410スーパーアメリカのモチーフを盛り込んだもの。エッジにクロームを配したデザインはクラシックとモダンの融合といえる。



ワンオフ・モデルを発注したオーナーの誇りはこんなところにも表れる。ドアノブに入れられたオーナーのインシヤルだ。オーナーはこのドアを開けるたびにドリームカーの実現を実感できるのだらう。

上方から見た612“カップ”スカリエッティ。ダークブルーのボディ、タバコ・ブラウンのインテリアという組み合わせがお洒落なグラントウーリスモらしい姿を現している。ガラス・ルーフの採用も効果的だ。



フロントフェンダーに新設された大きなエアアウトレット。かつてのフェラーリのレーシング・マシンの思い起こさせてくれる造形である。やや間延びした感のある612と比べると精悍な印象を与えるアクセントだ。